Nagoya City University

沖縄県粟国島の祭祀儀礼に関する考察（上）

――ヤガン折目を中心に――

阪　井　芳　貴

目次

はじめに
Ⅰ　沖縄県粟国島概観
Ⅱ　粟国島の祭祀調査記録　―「ヤガン折目」を中心に―
［1］2002年のヤガン折目調査記録
［2］2003年のヤガン折目の調査による補足
［3］2003年のンナトゥイ折目の調査
Ⅲ　ヤガン折目をめぐる不明点・疑問点と課題
参考文献

はじめに

本稿は、2002年と2003年の夏、旧暦６月25日前後に沖縄県粟国島で調査をおこなった島最大の年中行事・祭祀儀礼である「ヤガン折目」およびその他の祭祀の調査記録を整理し、分析をおこなうものである。その目的は、直接的には、未解明の粟国島の祭祀儀礼と伝承との関連および継承の問題を中心とする神人組織について明らかにすることにあり、その延長線上に、琉球王国時代の首里王府と地方の力関係、口承伝承と祭祀儀礼との関係性、近代化の中での祭祀や神人組織の崩壊と再編の問題等について考察することにある。

まず、本小論（「上」）では、二度の調査記録をまとめて整理し、考察の見通しを提示し、続稿において、本格的な分析を試みることにする。

Ⅰ　沖縄県粟国島概観

1．島の位置・島へのアクセス

粟国島は、那覇の北西約57キロ、北緯26度34分・東経127度13分に位置し、東に沖縄本島、東南に慶良間諸島、南に渡名喜島、南西に久米島、西に鳥島を望む。面積約7.6平方キロ、周囲約12キロの、ほぼ三角形の島である。最高地点97.3メートルの低島で海岸段丘と海岸砂丘、砂浜、サンゴ礁からなるが、島の南西海岸には火山岩が露出している。考古遺跡は、貝塚時代前期からグスク時代にかけてのものが確認され、多くは石灰岩洞窟に形成されている。

島へは毎日フェリーあぐにが那覇泊港と一往復（片道２時間）、琉球エアコミューターの

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

９人乗り軽飛行機が五、六往復（片道20分）しているが、天候条件による欠航も多く、アクセスに恵まれているとは言えない。

２．島の人口・産業

粟国島は一島一村で、西・東・浜の三部落からなる。人口は2003年５月末の統計によると、433世帯、889人。（うち小学生43人、中学生34人、幼稚園児20人）かつては4000人以上の人口があったが、今では過疎の島である。島に高校以上の高等教育機関はなく、子どもたちは中学卒業と同時に沖縄本島に島を出るのが通例である。ただ、近年県外から移住してきた若者や、製糖・製塩工場に一定期間従事するため比較的長期間滞在する若者もいる。

主要産業はサトウキビ中心の農業であるが、粟国島を全国的に有名にしたのは自然製法による塩（「粟国の塩」）である。島名の由来である粟やモチ黍の栽培も再び増えている。

また、2000年に全国的に大ヒットとなった映画「ナビィの恋」（中江裕司監督）のロケ地として知名度は上がったが、粟国村はそれを島起しに利用しようとは殆ど考えていないように見受けられる。

３．島の祭祀と年中行事

現在島の祭祀に携わるのは、ノロと呼ばれている神人７人（ノロ座３名、スイミチ座４名）と三部落の区長、ニーブ（神酒の管理者）、ユノーサ（ヤガン折目のみに出る祭の準備役）、手伝い役の男女数名（男はヤトゥイとかコーサクと呼ばれる）である。

先行研究によると、

本ノロ・若ノロ・スイミチ・メーダキ（ネーダキとも）・ウフンチュー・ヒタマル・ウフンチー・ユナンサー

の８名による組織であったとされるが、既に戦前には途絶えて継承関係などについてもわからなくなっていたようである。現在の神人も、個人的に神様の声を聞くなどの事情から神人となった方ばかりである。

島には、御嶽と殿、井などの聖地・拝所が全部で40箇所ほどあるという。このうち『琉球国由来記』に記載されている御嶽は次の９箇所である。

①ガダノコ御嶽　②八重の御イベ　③テラチ御嶽　④ヲコノ御嶽　⑤同中ノ御嶽
⑥同ハイノ御嶽　⑦シマイ御嶽　⑧アラバ御嶽　⑨ヤカン御嶽

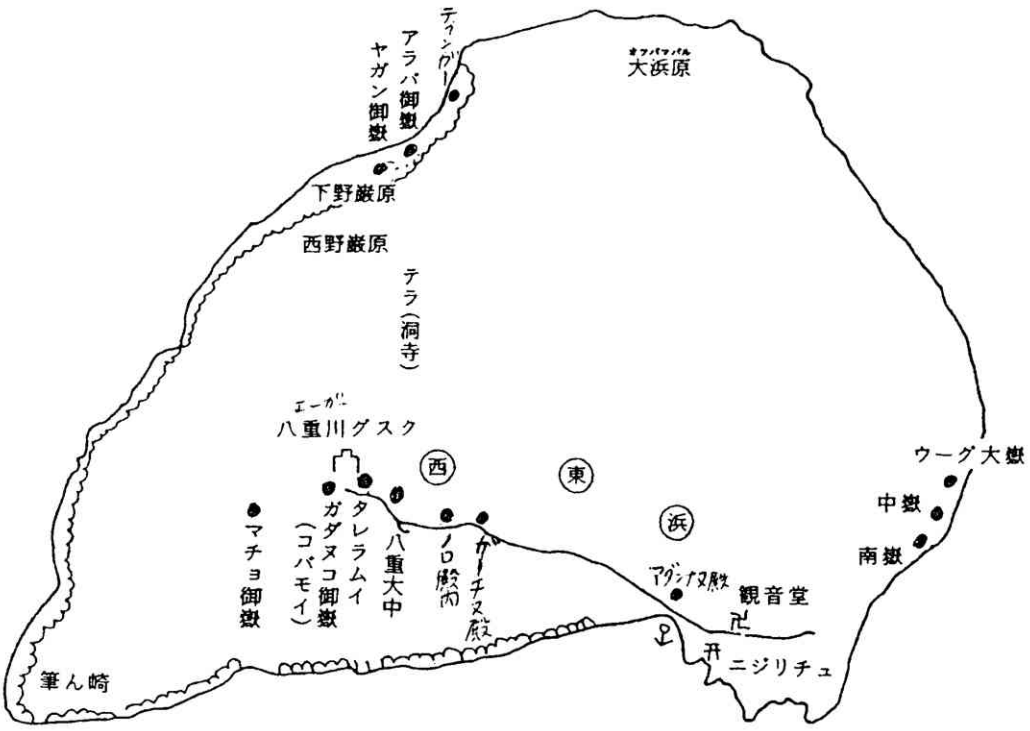
また、同じく『琉球国由来記』に記載されている殿（トゥン）は次の５箇所である。

①八重ノトノ　②安次富ノトノ　③カキノトノ　④浜ノトノ　⑤トマリノトノ

これらが古琉球時代からの古い聖地であると考えられるが、時代とともに聖地・拝所が増幅していったのであろう。すべての聖地・拝所を廻るのは、旧正月の初御願と旧５月の島御願の時に限られ、どとらも数日かけて廻るとのことである。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University



〈粟国島の聖地〉

神人がかかわる年中行事は、現行では以下の通りである。

旧暦１月５、６日		初御願
２月	16日	虫ンロ新門
２月	26日	虫ンロ中門穂祭り
３月	６日	ミーコージ折目
３月	16日	虫ンロ止門
４月	７日	草戸折目
５月	15日	島御願
５月	23日	粟シチョマ
６月	14日	６月折目
６月	24日	山ン神
６月	25日	火ヌ神祭
６月	26日	ヤガン折目
８月	10日	港折目
10月	１日	釜マーイ
12月21、22日		シリガフー

これらは、島全体の祭り・行事であり、このほかに門中単位でやる行事、たとえば旧暦９月１日と15日に行なわれるグーシーなど、家単位で行なう行事、たとえば旧正月や旧盆、後

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

述の柴差しなどがある。また、ハーリーなど島全体のイベント的な行事もあり、人生儀礼も盛んに行なわれている。

Ⅱ　粟国島の祭祀調査記録　―「ヤガン折目」を中心に―

［1］2002年のヤガン折目調査記録

1．**調査日**：2002年８月１日～６日（旧暦6月23日～28日）

2．**インフォーマント**：玉寄美江子（88歳）・小嶺静子（80歳）・岸本好子（73歳）・伊佐チヨ（64歳）・伊佐達雄（64歳）・玉寄セイ子・小嶺剛ほか

（年齢は調査当時のもの、敬称略）

3．**調査記録**

8月１日（旧暦６月23日）

午前10時泊港発のフェリー粟国で出発、12時半粟国島着。徒歩５分の民宿寿に行く。宿の主伊佐チヨさんから、夫の伊佐達雄氏が島の年中行事を資料としてまとめていると聞く。

民宿寿別館にいる伊佐達雄氏に会う。ヤガン折目の由来は『粟国の民話』にあるとのことで、川端つやの話など聞く。氏の話。「ノロは、小嶺さんと玉寄さんという人がいるが、年をとっている。その他はわからない、スイミチ・ノロ・今帰仁の三つの座がある、助役（城間氏）の家が代々ノロを出す家で、助役の母親もノロをやっていた。」伊佐家の行事をまとめた『中ん屋大屋の祭り事』を貸していただく。

村教育委員会に行く。委員会の与座芳一氏の話では、ヤガン折目の記録を村では取っていない由。『粟国村誌』の該当ページをコピーしてくれる。委員会の職員の女性が、今日夕方ウムイの練習をノロ殿内でするはずだと教えてくれる。

村役場で助役の城間氏に会う。自分の母親は95歳で、昔はノロをやっていたが、自分は何も知らない。家からは今はノロは出ない。今日５時から歌の練習がある、その後三役と神女とで、神迎えの儀式がある、と聞く。

助役に、村の車でティラ（洞寺）・むんじゅる碑・ヤガン御嶽の近くまで案内していただく。ただし、御嶽には祭りの期間は近づいてはならない由。見えない結界が働いているようだ。島の現況についても教えていただく。

午後４時ノロ殿内に行く。自己紹介し、殿内の中に上がらせていただき、お話を伺う。ここに集まるのはノロ。別の場所にスイミチ座の神女が集まる。殿内は二部屋で、仏壇（香炉一つあるのみ）のある部屋と、その西側に比較的大きな火の神を祭る小部屋からなる。仏壇のあるほうで作業などを行う。

５時過ぎ紺絣の着物に琉球風の髪を結った３人のノロが揃い、オモロの練習が始まる。３人は年齢順に、玉寄美江子（88歳）・小嶺静子（80歳）・岸本好子（73歳）である。小嶺さん

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

がリーダー。今日は稽古の３日目、明日から祭りになるので、練習は今日まで。練習する歌は旧６月でないと歌ってはならない歌。普段は練習できない歌である。それぞれ持っているクバ扇を左右に動かし（表裏を交互に）小嶺さんが先導し、２人が復唱していく形。４曲目までは座って歌うが、５曲目から立ち上がって足のステップを左右に踏み出す形でつける。神様を送る歌とのこと。朝の稽古は朝の、夕方のは夕方に歌う歌。一曲終わるごとに、軽く神拝みをして、先に進む。歌は小嶺さんと玉寄さんのノート（歌詞カード）を見ながら歌う。ところどころ間違えて戻って歌ったりしている。曲はどれも同じような感じで、いわゆる琉球音階ではない。５曲で終わり、しばらくゆんたく、明日の確認（午前９時にノロ殿内集合、東御嶽に行き、それから西の御嶽でカーブイを採る）などを行い、６時40分に解散。３人はそれぞれの家に帰っていく。　⇒［写真１，２］

８月２日（旧暦６月24日）

午前９時ノロ殿内。ノロ３人は揃っているが、ビンシーの酒器に入れる泡盛等の用意が出来ていないので、区長を待ち、時間が遅くなる。スイミチの４人の神女も集合。

９時半出発。東御嶽に行く。道路から東に入って半円状に降りていくところである。香炉は島の中央に向いている。落ち葉などを取り清掃して莫蓙を敷き、小嶺静子さんを中心に拝みが始まる。拝みの後に、手伝いの男性が桑木（クヮーギ）の枝を採り、太鼓の撥として使うためその場で小枝を払い、適当な長さに切る。それがすむと移動。ここで、道に戻るときにスイミチの神女に道を譲ると、先に行けといわれた。神様が後ろから呼ぶときがあるのだと言う。　⇒［写真３］

10時半ころ、島の西のマツィン御嶽（松の生えている御嶽）に行く。イタジイが生えている。（島の中でここだけ土壌が違うらしい。）その葉をカーブイに使う。

まず御嶽で拝み。東でもそうだが、ノロ殿内のノロさんが前に座り、後ろにスイミチの神女が座る。拝みの後、神女７人は手ぬぐいやタオルを頭にかぶり、イタジイの葉を採る。葉を選びながら、一時間かけて袋に一杯に採る。途中、お茶の時間をとる。莫蓙を敷き、スイミチの４人が用意してきた茶菓で一服するが、そのことが後で問題となる。

⇒［写真４，５］

必要な分を採り終えると、ノロ殿内に戻る。小嶺さんは帰宅、岸本さんは採ってきた葉とカーブイ作りの土台となる麦わらを洗い保管する。玉寄さんは休息をとり、娘のセイ子さんが岸本さんの手伝いをし、クヮーギも皮をむき、きれいに洗って干す。これで、いったん解散になる。

午後２時から、玉寄セイ子さんが車で島を案内してくださる。浜・東・西の拝所、筆ん崎、展望台、洞寺（の見えるところ＝近づけないので）、沖縄海塩研究所、北魚港、ウーグ浜、観音堂などを回る。粟国島が火山島だったことがよくわかる。玉寄さんは、車を運転しなが

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

らも、拝所や何か神に関する場所場所で軽く頭を下げている。彼女の話。「大阪から島に帰ってきていて、高齢の母美江子さんの世話をしている。(いずれ母の跡を継いでノロになるのかとの問いに) 母と娘でもぜんぜん違う、神様の声が聞こえたり姿が見えたりしないとだめとのこと。折目の日は節供にもなっていて、家での準備は私がしなければならないから大変だ。」

岸本さんの話。「昨年のヤガン折目は祭りの儀式のやり方が問題となった。スイミチの4人は簡単にカーブイを作ったりして、やり方が全然違う。それで、こちらの体が動かなくなったりして、うまくゆかなかった。今日も、葉を採る間に莫蓙を敷いて休んだりしたのはおかしい。神様への供え物の扱い方も、供えた酒を戻したりするのはおかしい、等々いろいろ問題があるとのこと。ノロの中でも自分は一番下だから、他の二人に気を使っている。早く来て準備をしたり、先輩に仕えている。那覇に住んでいるので、行事のたびに島に来るのは大変。」

夕方6時48分に公民館のあるタレーラムイに着くと、既に神女6人が白衣装を着て着座している。あと1人が7時に着くが、まだ明るく、暗くなるのをじっと待っている。我々調査者や区長はじめ村の手伝いの人々は神女からは数十メートル離れた公民館の庭で待機させられる。徐々に闇が支配し、緊張感も高まってくる。 ⇒［写真6］

神女7人にニーブーヤ（神酒の用意をする男性）が準備を整え、7時35分に儀式が始まる。暗い中、拝みが続けられ、神迎えが行われる。8時20分頃終了。神女たちのちょっとした体の動きで、神が迎えられたことがこちらにも伝わってくる。神女たちが向かっている方角（ヤガン御嶽のほうか？　あるいは北か？）から赤い光が見えて神の降りたことがわかるのだそうである。

その後、我々も神女の座に加わることが許され、神酒を振舞われる。 ⇒［写真7］

9時に解散。終了後小嶺さんのお宅に招かれ、宴会となる。静子さんも着替えて、ちょっとだけ顔を出されたが、儀式の間とは全く違う表情をされていた。

8月3日（旧暦6月25日）

8時45分ノロ殿内に行く。既に、岸本さんがイタジイの葉を新聞紙の上に広げて乾かしている。9時10分、3人が揃い、お茶とぅ・拝みを仏壇の香炉にしてから仕事が始まる。麦わらの束を頭に合わせて丸くし、それに半透明のビニール紐を巻きつけてドーナツ状の土台をつくる。かなり丈夫なつくりになる。それに、イタジイの葉を一枚一枚糸で縫いつけていく。根気と力のいる、かなりきつい仕事である。私も小嶺さんの針に糸を通す役目をおおせつかり、お手伝いする。岸本さんがやはり一番若いので、早く完成する。岸本さんは、太鼓の撥（シブク）も作る。こちらは紅白の布を巻いていく。試行錯誤しながら完成。出来上がると、香炉に向かって礼を述べる。おにぎりの昼食をはさみ、午後2時にすべて完成。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

この仕事の合間に聞いた話。御嶽はたくさんある。正月と島御願の年２回は全部廻る。今日は村で廻ることはしない。全部廻ると４、５日はかかる。西の山のほう、村の中など、場所によって拝むエリアが異なる。行事によっても廻るところが決まっている。ノロは、今帰仁・首里・久高島・玉城・知念なども廻らされる。ノロになるときも、ちゃんと廻らないと体にくる。昨日の神迎えで、山の神、御嶽の神みなお迎えした。展望台のほうに最初に神様が天下られた。戦前のノロは馬に乗っていた。昨日の神迎えで、スイミチの神女が神様に言うべきではないことを口にした。岸本さんは「60歳でノロになった。この道に入るとは思っていなかったが、いろいろ見てもらって、自分で道を歩かないといけないとわかった。母は神女ではない。父は京都の人だった。自分は17，８歳まで島で暮らしていて、那覇に出た。」小嶺さんは、「50歳まで病気がちだった。それでノロになった。今日の供え物は、昔は各家から魚の干したものを持ってきたが、今はやらない。村が漁協を通して用意する。秋刀魚などの内地の魚を使う。カーブイの葉には男女がある。左を下に交互に合わせてゆく。めくれないようにしっかり縫い付ける。自分のカーブイは自分で作らなければならない。神様のものは手間隙かけないといけない。」 ⇒［写真８］

いったん民宿に引き揚げ、一休み後、早めの夕食をとる。

夕方５時50分、イビガナシ・エーウフナカに行く。公民館近くの祭場で、儀式のための施設が集まっている。神女は既に皆揃っている。６時15分からナーウマチーが始まる。神女７人とニーブにより、まずニーブの祈りが火の神で始まる。神酒とバーイ（焼き魚）を供えて始まる。神酒はノロ座とスイミチ座で二椀ずつ供える。その後、今帰仁祠・ノロ座・ナーと、場所を変えて拝みを行う。７時半に終了。 ⇒［写真９］

その後、再び小嶺家に招待される。

８月４日（旧暦６月26日）

午前８時50分ノロ殿内に行く。岸本さんが既に来ている。９時過ぎに３人が揃うが、小嶺さんはウフムトゥにいったん参り、やがて戻ってくる。９時40分、区長の手伝い役の太鼓と銅鑼の先導で正装した（カーブイをかぶる）３人が出発、エーウフナカに行く。道々銅鑼と太鼓をたたいて歩く。決まったルートである。

着くと、既にスイミチの神女４人が揃っている。今帰仁祠・火の神に礼拝の後ノロ座に着く。ノロ座・スイミチ座ともにテーブルが置かれ香炉が載っている。ノロ座の前にはテントが設営され、折りたたみいすが並べられている。老人ホームの入所者や障害者の席になっている。三々五々村人が参集する。各座の柱などに、魚の開きの焼いたもの（バーイ）がくくりつけられている。魔よけとのこと。また、上座では参拝者に配られる神酒とバーイの準備がずっと行われている。

10時過ぎ、ノロ座で三人のノロと村長・助役・奏上者がテーブルを挟んで向き合い座る。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

村長らの後ろにバーイの入った高膳を抱えもった手伝いの男性（ヤトゥイ）二人が立つ。奏上者は巻物を取り出し、ウンヌキグトゥを奏上する。神女に対して、祭祀の準備を整えましたので、神様に豊作豊漁を祈願してくださいという内容。それがすむと、テーブルに用意されてあった膳（神酒が入った椀が二つ載っている）をノロが村長らに手渡し、受け取る側は礼をして恭しく戴き、神酒を飲む。飲む干すとバーイがノロから手渡される。これで儀式は終了　⇒［写真10］

その後村人や見物人が祝儀袋や泡盛の一升瓶などを神女に捧げ、同様の儀式をして神酒とバーイを戴く。神女から健康を祝福してもらうのである。テントの老人・障害者の方々もその場で神酒とバーイを戴く。　⇒［写真11］

一通りすむと、スイミチ座でも同様の儀式が始まる。ノロ座では、太鼓・銅鑼の２人の伴奏でノロ３人がクバ扇を左右に動かしながら、オモロを歌う。８月１日に練習していた歌で、本番でもノートをテーブルの下に隠して、いわばカンニングをしながら間違えないように歌う。スイミチ座でも同様の歌が歌われる。　⇒［写真12］

人が絶えると終了、12時半ころノロ・スイミチ両方の神女が揃って殿マーイが行われる。適宜村役場や家族の車に分乗し、拝みをして廻る。各拝所では、あらかじめブルーシートで日よけが施されている。廻るのは、アストヌ殿・ガーチヌ殿・ババヌ殿・トゥマンナヌ殿・ノロ殿内（一休み）・アダンナヌ殿の順。各拝所で小嶺さんが中心になって拝み、神酒とバーイそれぞれ二膳と線香を供える。アダンナヌ殿では見物人や手伝いの人々に神酒とバーイが配られた。これでいったん解散する。　⇒［写真13］

夕方４時、再びエーウフナカに集合。午前中と同様の儀式の後に、日が西に傾く中、ナーでノロとスイミチの神女が向き合って立ち、オモロを掛け合いで歌い、前後に引き合うように動き、徐々にチーグ座に近寄っていく。立ちウムイである。それを20分くらい繰り返して全員チーグ座に着く。神女７人は横一列に並んで座り（ただしノロ・スイミチで分かれている）、再び村長らの奏上から始まる儀式となる。　⇒［写真14，15］

村人らの礼拝も終わると、神女たちはチーグ座から出て、火の神裏でヤガン御嶽の方角に向かい莫蓙を敷いて座り、線香を供え拝みをし、その後カーブイをはずし、一メートルほどの高さの薄板状の石三つが立つイビガナシにカーブイを重ねて置く。神送りの儀式である。これで、神行事がすべて終了となる。　⇒［写真16］

引き続き、公民館の横の広場（西の山に面した場所）で、村人らが集まって子ども及び青年の相撲（琉球相撲）、カラオケ大会などの余興が行われる。村役場の青年たちが受付、飲食物の店をやっている。助役にビールをご馳走になり、しばらく相撲を見た後、民宿に引き揚げ、夜は小嶺家で宴会。

８月５日（旧暦６月27日）

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

10時過ぎにエーウフナカに着くと、村役場の人たちがテントの撤去をしている。カーブイはちゃんと置かれている。西の山の御嶽などを確認。

午後、小嶺剛さんに車で島を廻ってもらう。ヤガン御嶽は、静子さんの話では、まだ祭りが終わっていない、今日は衣装洗い、明日神女の慰労会がある、それが終わると祭りが本当に終わったことになる、それまではヤガン御嶽には行ってくれるなということで、行かれない。それで、御嶽が見える場所まででストップ。小嶺家の墓にも案内していただく。墓にもあまり人は行きたがらない。いわゆるグソー道を行く。海が見える南斜面に墓はある。村の集合墓地の中で、入り口は石を積み上げただけなので中がのぞけそう。本島のものより古風。小嶺家の墓には家の人々と墓を作った人とを納める。厨子甕が並んでいるそうである。小嶺家の墓の下の別の墓を見に行くと、入り口がなくなり、厨子甕が散乱し骨も見えている。また小嶺家の墓に行く途中には入り口が３つある巨大な墓も見られた。

小嶺家本家に寄り、ゆんたく。系図を見せていただく。剛さんの話。「護佐丸六世豊見城親方盛良の二男盛紀を祖とする伊野波家の三世盛忠が粟国島に来て、島の女性に産ませた子三良が小嶺家の最初。５年に一度、中城城・護佐丸墓・山田城などを廻る。小嶺さんは９人兄弟（１人夭折)。下の妹は先祖の声が聞こえる。また、母（静子さん）は先代ノロ（父の母）より位が高かった。それで苦労していた。最近、荒れていた本家の庭をきれいにしているうちに、庭の中で玉や拝所を見つけた。」

夕方民宿に帰り、同宿の通信設備工事の方々と夕食をとる。

８月６日（旧暦６月28日）

午前９時ノロ殿内に行くと、岸本さんが準備をしている。10分後に小嶺さん、玉寄さんが着き、ユーヌ神・国神・カーヌ神・・・の神戻しをする。（神送りとは言わない。）お茶・水・ご飯・豆腐・餅・ビンシーを供える。線香を７本・17本・２４本などの束にして（輪ゴムで束ねる)、ノロ殿内内の左の部屋の火の神に供え、半紙に米・泡盛を置き（注ぎ）拝む。餅も供え、それからお茶等を揃えて、ウチカビ・半紙もととのえて、ノロ殿内の内から外に向かって供え、線香に火をつけ拝む。終わると供え物の一部やウチカビなどを殿内下の水道のところで燃やす。これですべて終了。神様がそれぞれの場所に帰ったことになる。区長３人も加わって慰労会。その後、ノロはそれぞれの元屋に行って拝みをするとのことだが、那覇行きの船に乗る準備のため、その後については未見。

午後２時の船で島を離れる。４時半に那覇泊港に着く。

［２］2003年のヤガン折目の調査による補足

１．2002年との相違点など

2003年は旧暦６月24日に当たる７月23日に粟国島に渡り、27日まで滞在した。したがって

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

カーブイ作りのためのイタジイの葉を採っているところからの見学となったが、2002年には最後まで見届けられなかった神戻しの儀礼は最後まで見ることができた。また、2002年にはスイミチ座の神人には話を聞かなかったが、2003年はインフォーマントとして玉寄八重子・宮里清子・並里ツヤ子・新城菊江の四人から聞き取りを行なった。

祭の内容は、当然のことながら、基本的に前年と同じことが繰り返されるのであるが、諸所に違いが見られたので、相違点を中心に補足を含め列記していく。

・旧６月24日のイタジイ採り：2003年は途中で休憩を入れずに、短時間で終了した。

・旧６月25日のカーブイ作り：シブク（太鼓の撥）をつくるための桑木の枝のうち一本が適当な大きさではないので、昨年のものを再利用することになった。昨年のもう一本は処分するというのでほしいと申し出ると、神人たちは口を揃えて駄目だと言う。神様がシブクに残っているからということであった。

・スイミチ座のカーブイ作り：カーブイの土台の輪は萱で作る。その輪にビニール紐を全体に巻きつけるのではなく、数箇所を縛っておくだけである。イタジイの葉の縫いつけ方も上下逆方向の二列にしていく。こちらのほうが作るのにかかる時間は少なくてすむ。

・旧６月26日朝フララ：エーウフナカに着くと、火の神を守る家であるニーブーヤーの当主の妻（当主は入院中）が火の神の祠の中に入って、モチ黍などを供える。その後ろでスイミチ座の神人４人が並んで拝みをする。ノロ座の神人は参加しない。どうも個人的な拝みであったらしいが、ノロ座の神人たちに言わせると、島の祭の時に個人の拝みはすべきではないとのことであった。また、台風の余波でフェリーが二日間欠航になった影響で、島に帰ってくる人が少なく、老人・障害者のための席も設営されていなかったので、寂しい祭となった。

・旧６月26日朝フララ：ウネージャクの島人の参拝が一段落した後にウムイが歌われるが、2003年はスイミチ座から始まってしまい、ノロ座があとから歌いだすということになった。時間がおしていたのと、何かノロ座の神人に起こったのかもしれな。その後、終わりまで2002年とは異なるアクシデント的なことが次々に起こった。

・旧６月26日殿マーイ：2002年には寄らなかった浜部落のヒヤガーヌウタキにも廻る。2002年は忘れていたという。新たに浜から若い人が（ノロに）たつらしいというので思い出したとのこと。しかし、このウタキでの拝みは記録には出てこない。

・旧６月26日夕フララ：タチウムイで、小嶺さんが一人先にスイミチ座に走り寄ってウムイが始まり歌が揃わなかったのと、ウムイの終盤に歌が交錯しわけがわからなくなってしまったようであった。もともとノロ座とスイミチ座で掛け合いをやるのが本当であるが、今は同じ歌を繰り返している。そこにも原因がある様子であった。

・旧６月26日祭の最後：カーブイを2002年は国火の神の横のイビガナシに置いたが、2003年は今帰仁祠に納めることになってしまった。これはスイミチ座主導で、玉寄さん、岸本さ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

んが戸惑っている間に決まってしまった。ただ、過去の調査記録を見ると今帰仁祠に納めている例もあり、また本来はクバウタキに納めるはずだというので、必ずしも誤りであるとは言えない。

・旧６月28日神戻し：ノロ殿内での儀礼は2002年は途中までしか見ていないので感じなかったが、旧６月24日のタレーラムイでの神迎えと同様、神秘的な儀礼であり、静寂のなかで行なわれなければならない。ビデオ撮影もこのときは禁止された。線香の本数に重大な意味があるので、神経を使って拝みをするのが印象的。

２．聞き取りによる補足

・小嶺静子さんの話：カーブイの土台となる輪を作る麦わらは、３月に実を取って行事に使い、そのあとに藁を残しておいて使う。ビニール紐がなかった昔は、ユウナの繊維を用いていた。アダンからも繊維を取って、網を作ったりした。

昔ノロとして初めて座ったころ（五十歳くらい）は、虹のように赤・青の光がヤガンの方からサーチライトのように向かってくるのが見えた。神様がちょうちんを持ってくるのが見えることもあった。今回は、線香を供える前から、目の前に神様の姿が見えた。

神様にお仕えするようになってから、病気も治った。それまでは大変だった。仕事もできないほど体がつらかった。今は、行事に若い人を行かせないようにしている。若い人でも神ダーリする人がいるが、親やおばあさんが、ノロの役につかまると大変だといって近づかせない。今回も若い人が二人くることになっていたが…。

個人的な御願を頼まれることも多い。

・並里ツヤ子さんの話：スイミチ座の４人のうち３人が沖縄本島に住んでいるので、月一回くらい、行事のために島に帰ってくる。個人的な御願を頼まれることもある。

立ちウムイは、神様と一緒に踊って、神様を喜ばせてお帰りいただくためにやる。

・新城菊江さんの話：私は、自分の門中の先祖の神様のことを全部調べた。お墓も位牌もちゃんと整えた。そうすると今度は神様が、拝みのために座りなさい（神人になりなさい）とお告げがあった。一年待ってくださいとお願いして、準備をしてから座った。子どもたちがもうやめたらどうかと言うけれど、やめたら殺されるんだよと言っている。神様のことは死ぬまでやらないといけない。

スイミチ座は根神。スイミチ座は初めて粟国に降りた神、ノロ座のノロは島ノロといって初めて神様を立てたノロ。スイミチ座から粟国ノロが出る。ヤガン折目には子どもができない人がお参りに来る。県外からも来る。そして、子どもができるとお礼にまたやってくる。赤い饅頭を配る。子どもが13歳になるまで来る。昔は、神酒も各家から芋をするつぶしたものを持っていって作った。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

［3］2003年のンナトゥイ折目の調査

1．調査日：2003年９月６日（旧暦８月10日）

2．調査記録

＜柴差し＞

旧暦８月10日は全県的に柴差しの行事が行なわれる。粟国島でもほとんどの家で行なわれていた。午前中に家の近くでススキを刈ってきて、二本ほどを束にし、それを桑の枝葉で巻いて柴を作る。それを家の四方の軒先に差しておく。魔除けである。翌日が、一年でもっとも悪い日「ヨーカビー」であるので、必ず柴差しは欠かせない。粟国島では空き家が多いが、門中の人（親戚）が空き家の分もやる。

小嶺静子さんの話では、ヨーカビーには夕食を早くとって静かにしている。自分には、何か悪いことがある家には煙が立つのが見えるという。火の玉が見えることもある。病人がいる家などには、黒線香が玄関先で燃えているのが見えることもある。今はめったに見なくなった由。

＜ンナトゥイ折目＞

旧暦８月10日に行なわれるこの行事は、豊漁祈願の祭祀である。明治の頃までは魚を取ってきて焼いて、供え物とした。今はヤガン折目のバーイと同じ。道止めをして、網で魚をとる模擬儀礼を行なったがいまはやらない。厄だというので、一般の人は立ち入らせなかった。今も道止めは行なって、一般の通行を禁じている。

午後３時に小嶺静子さんとノロ殿内に行く。既に浜部落の区長がバーイを手伝いの人二人（うち１人は初めて祭祀に参加する女性。段取りをいろいろ教えてもらって、忠実に働いておられた。おそらく神の声が聞こえる等の事情があるのであろう。）と焼いている。ヤガン折目と異なり、供え物の分だけなのでそれ程量は多くないが、それでも50尾以上はある。小嶺さんは、半紙を二つ折りにする作業を始める。東の区長も来てビンシーの準備などを行なう。モチ黍がこの折目の大事な供え物である。少し経って、玉寄美江子さん、新城菊江さんがやってくる。線香の準備も始まる。何本かずつ束にするのだが、その本数にやはり神経を使っている。その束にした線香に火をつけ、ノロ殿内の左の部屋の「ユーヌヌス」の香炉、右側の火の神、ノロの香炉の順に供えていく。

午後３時半、神人３人は神衣装に着替える。ユーヌヌスから拝みを始める。ビンシーの酒と米、それに別の円形の器に入れてあるとモチ黍を紙の上に撒き、供える。このほかに、四角い盆に乗せたバーイ、果物、モチも供え物である。唱えごとは決まった言葉で、紙に書かれたものを小嶺さんも玉寄さんも持参しているが、儀礼の間にそれを見ることはなかった。ユーヌヌスのあとは、火の神・ノロ香炉の順に拝む。

午後４時、ノロ殿内からウフヤーデに移動、同様の拝みを行なう。以下拝みそのものは、

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

どの拝所でも同じに見受けられる。次に、西のウガンに移動、ノロウタキ・ミルクウタキ・エーガーを拝む。これらは区長たちや玉寄さんの話によると、この折目では拝まなくてもよい場所であるという。実際に、玉寄さんは車から降りなかった。

午後４時58分、エーウフナカの国火の神と今帰仁祠を拝む。午後５時15分安里殿、同32分ガーチヌ殿。ここで、東の区長が参加者に飲み物の差し入れを配る。

午後５時45分ババノ殿、同59分トゥマンナヌ殿。午後６時16分浜部落のヒヤガーヌウタキに廻るが、ここも拝まない場所という。同32分アダンナヌ殿を最後に、ノロ殿内に戻る。

一休みの後、午後７時５分再びガーチヌ殿に行く。ガソリンスタンドとノロ殿内の辻の間を、車で道止めをする。神人は殿の祠を背にして道に向かって座り（つまり南面し）、供え物を並べ、線香に火をつけて、ウチカビも用意して拝みを行なう。この拝みは、やはり静寂の中、慎みを持って行なわれる。一般の人を入れない形で行なうのである。

午後７時50分終了、祠の前に莫蓙を敷き、参加者にウサンデーが配られる。戦後まもなくの頃は、役場の人など、多くの島人が参加した。今は食べ物がたくさんあるので、参加者がいない、とは小嶺静子さんの弁。ウムイも昔は歌ったが、今は知っている人がいないとも。

Ⅲ　ヤガン折目をめぐる不明点・疑問点と課題

本稿は、2002年と2003年のヤガン折目の調査の記録を主眼に置き、続稿において詳細な分析を試みることにするが、その続稿で扱う内容について概略を提示しておく。

１．行事の由来および意義について

この行事については複数の由来伝承がある。ところが、この行事についての文字資料として最も古い『琉球国由来記』の記述には次のようにある。

> ヤカン祭トテ、粟神酒六ツ作リ、魚肴八重ノトノニアゲ、ノロ、根神、御タカベ、サバクリ、頭頭、朝八巻、百姓中相揃、拝四ツ仕也。御残リトテ、各呑喰ヒ申、二日遊申也。由来不傳

つまり、既に王国時代に由来がわからなくなっているのである。しかし、いつから伝承されているか定かではない口承伝承の形で、この行事については由来が語られてきた。その伝承の基本形は以下のようである。

> 昔６月になると、ヤガン原の辺りの畑で突風が吹いたり、近づいた人が目玉をえぐられたり鼻を削がれたり、妊婦は流産するといった災いが起こった。困った島人が今帰仁の王様に訴え、使わされた平敷大主がバーイ（干魚）と粟、米、酒を用意し鼓と鐘を鳴らして神をおびき出し、イビガナシまで来て見えなくなった。荒らぶる神を鎮めることができたので、それを毎年再現するのがヤガン折目となった。平敷大主への感謝として今

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

帰仁祠をつくった。

ところが、この由来譚には何通りかの伝承が存在する。それらの違いは、北山系統であるか首里系統であるかに分けられそうである。このことは実は、この島の歴史を物語る重要な要素になるのではないかという見通しを立てている。また、直接ヤガン折目の由来ではないが、アラバ神・ヤガンの神の由来を語る伝承も別にある。来訪神と神女のかかわり方を考察する上で興味深い材料である。

さらに、王国時代の史書『球陽』の尚敬王32年（1744）の条に記載されている奇怪な事件との関連にも注目すべきである。

以上のような伝承を中心とする歴史的な面からの検討に、行事の内容から分析を加えていくことで、この行事の由来と意義を明らかにしたいのであるが、行事の内容の分析には以下のような課題があると考えている。

まず、朝フララ・夕フララで歌われるウムイの内容の検討である。ウムイは、練習を重ねて儀礼の本番に臨むが、必ずしも神人の中に自然に覚えられていて口をついて出てくるというわけでは、残念ながらない。とはいうものの行事の中では極めて重要なものとして意識されていることは疑いない。このウムイの詞については先行研究もあるが、再度検討を加えたいと考えている。

次に、この行事は祭の構造、すなわち［①神迎え　②饗宴　③神送り］という形は明確であるが、迎えた神はいったいどこにおられるのか、そもそもヤガンの神はどのような存在なのか、伝承以外にその本質を明らかにできる材料はないのかを検討すべきだと考えている。また神戻しという儀礼があるが、一般の島人には夕フララのあとの神送りで終了したと認識されているのに、さらに神を送る儀礼があることについては先行研究は一切触れていない。これも残された課題であろう。

次に、この行事の目的であるが、現行の内容を見る限り、島の繁栄・島人の健康を願うとしか考えられないが、由来伝承からは鎮魂以外に目的は考えられない。その目的の変容の過程を探ることができると、祭祀のあり方と島人のかかわり方が見え、さらに祭祀が抱える今日的課題が明らかになると思われる。

一方で、ヤガン折目の期間にはヤガン御嶽・アラバ御嶽に近づくことを避けるという意識が多くの島人に今も働いていることにも注目したい。一種の結界が働いているのであるが、祭祀の意義とは別の次元で、こうした民間信仰的な禁忌が生きていることは興味深い。

神人が心を込めて何時間もかけて作り、儀礼の間かぶっているカーブイの意義も再検討が必要である。ノロもスイミチの神女もかぶるのであるが、作り方が異なるなど、そのあり方には未詳の部分が多い。

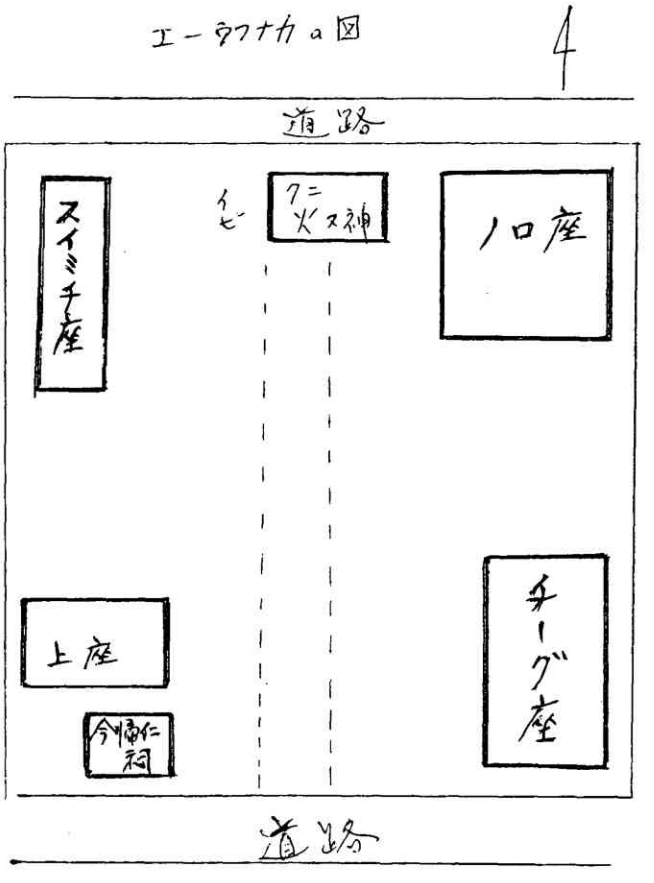
行事の祭場であるエーウフナカ（八重の御イベ）の構造にも検討を加えなければならない。現在の形は比較的最近になってつくられたものであるが、戦前はどうだったのか今のところ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

それを語れるインフォーマントに巡り会っていないが、何とか古い形をさかのぼることができれば、神人組織や北山と首里との関係などにも解決のめどが立つのではと期待されるのである。

さらに付け加えれば、本稿続編でもまだ扱えないのであるが、近隣の島々の類似の祭祀儀礼との比較も、視野に入れておかなければならないであろう。粟国島の南正面に見える渡名喜島をはじめ、慶良間諸島、久米島の神人組織および祭祀から、粟国島の祭祀の古い形を推定できる材料が得られる可能性は高いのではないかと思われる。



2．神女組織について

Ⅰの３で述べたように、現在「ノロ」と呼ばれる神人が７人（厳密にはノロ座のノロが３人、スイミチ座のノロが４人）いるという状況は、他の沖縄の島々にはあまり見られないものである。複数の神人がいるところはいくらもあるが、それぞれ神役の名前を持った神人として継承すべき人がなっているのが普通である。それに対し、粟国島の現在の神人の方々は、前述したように、その継承の論理も不明となっているし、彼女たち自身が、「現在はノロ殿内の本当の粟国ノロは出ていない、私たちは手伝いをやっているのみ。粟国ノロと花城ノロが首里から遣わされたノロで、今はいない。」（小嶺静子さん）という認識で、不完全な形であることを認めている。しかし、彼女たちの間でも「位の上下」の関係があるらしく、必ず

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

しも年長の神人が祭祀を主導するわけではない。そうした関係が、他者には極めて不明確に、あるいは容易に理解しがたい形で存するのが現状である。

何人かの神人に聞いたところでは、自分が神人になるに当たっては、ユタに相談している由である。そうしたことも、本来の継承の廃れたあとの、新たなあり方として受け入れられているというか、神人にとっても島にとっても、そうせざるを得ない状況であるということであろう。すなわち、神の島として名高い粟国島である。神人組織がまったく廃れるということは考えられず、また島を出て沖縄本島や本土で暮らしていても、肉体的精神的に神に仕える存在にならなくてはやっていけなくなる女性がまだまだいるという、その両面が、かろうじて粟国島の祭祀と神人組織を支えているということになる。

こうした現状について、神人たちがどのように認識しているのか、また島人はどうなのか、本来の粟国ノロの継承は今後ありえないのか等々、今後考察してゆかねばならない。

参考文献

［ヤガン折目関連］

・『琉球国由来記』

・『粟国村誌』粟国村史編纂委員会編　1984

・『沖縄の祭祀―事例と課題』高阪薫編　三弥井書店　1987

「粟国島ヤカンウユミ」（武藤美也子・高阪薫）＝1985年の調査による

・「南島文化（沖縄国際大学南島文化研究所紀要）」第11号 1989

「粟国島のヤガン折目―由来譚・儀礼・神歌―」（畠山篤）＝1988年の調査による

・『神々の古層８異界の神ヤガンの来訪　ヤガンウユミ粟国島』比嘉康雄　二ライ社　1991

＝1989年の調査による

・『沖縄の神歌　沖縄の神歌伝承活動（Ｖ）』沖縄県教育庁文化課編　沖縄県教育委員会　1992

「粟国島のヤガンウユミの神歌」（玉城政美）、「粟国島のヤガン折目―演唱・演技を中心に―」（金城厚）＝1991年の調査による

・『粟国島の民話』遠藤庄治編　粟国村教育委員会　1992

・「沖縄の祭　－大和人から見た沖縄粟国島年中行事の現状―」上砂智子　2002

2001年度卒業論文（早稲田大学）＝2001年の調査による

［その他］

・『島尻郡誌』

・『琉球王朝古謡秘曲の研究』山内盛彬　1964

・「郷土研究」第３号　糸満高等学校郷土研究クラブ　1967

・「沖縄民俗」第15号　琉球大学民俗研究クラブ　1968

・「郷土」第７号　沖縄大学沖縄学生文化協会　1968

・『南島歌謡大成―沖縄編上』外間守善・玉城政美編　角川書店　1980

・事典『沖縄大百科事典』1983　沖縄タイムス社　「ヤカン折目」項（湧上元雄）

・事典『沖縄県の地名』2002　平凡社　「粟国島」項

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

写真１

写真２

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

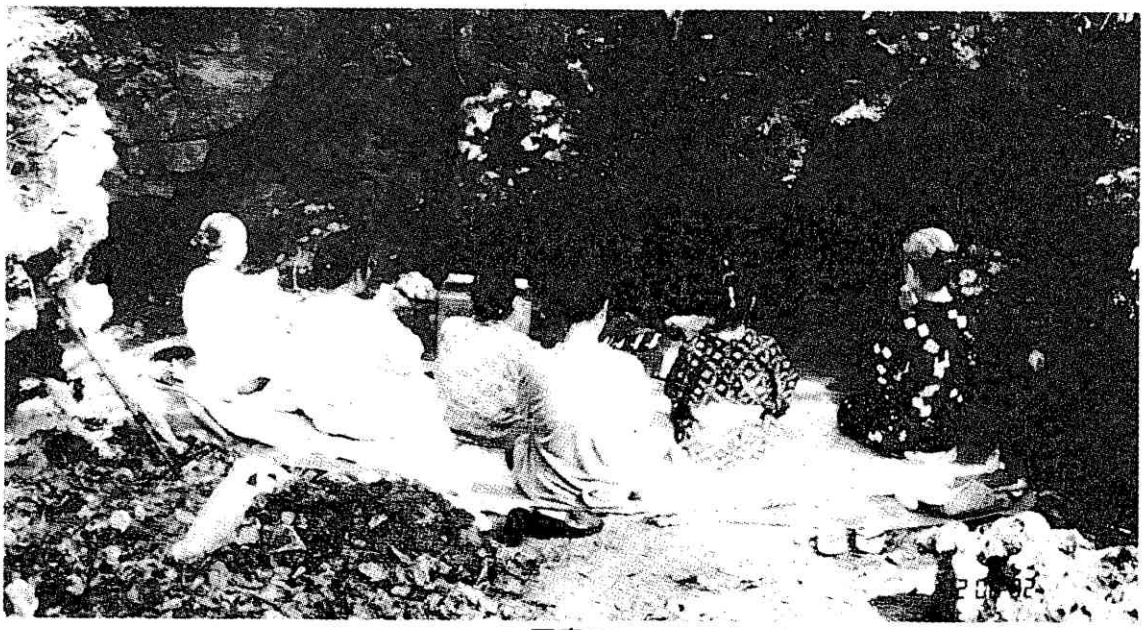


写真３

写真４

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

写真５

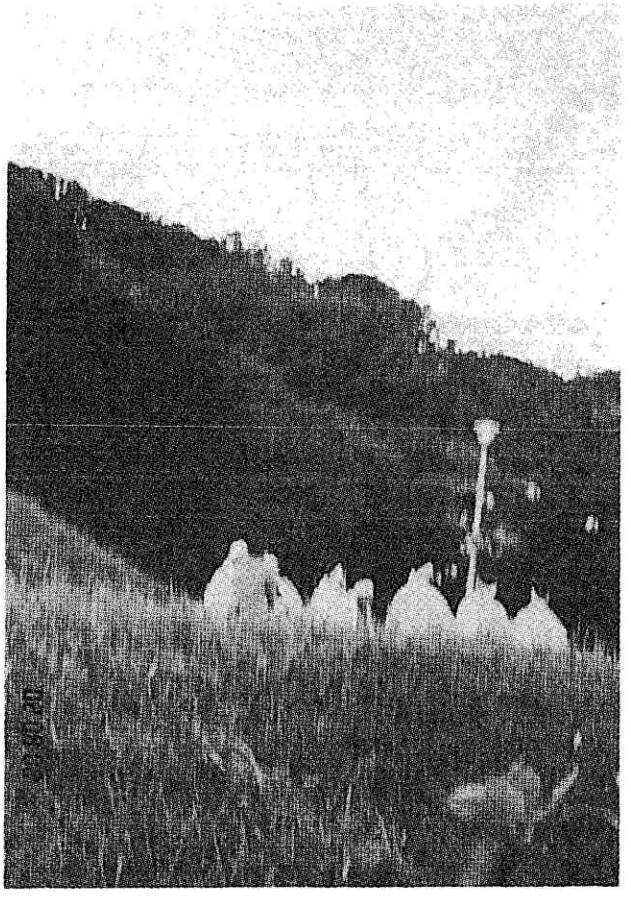


写真６

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

写真７

写真８

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

写真９

写真10

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

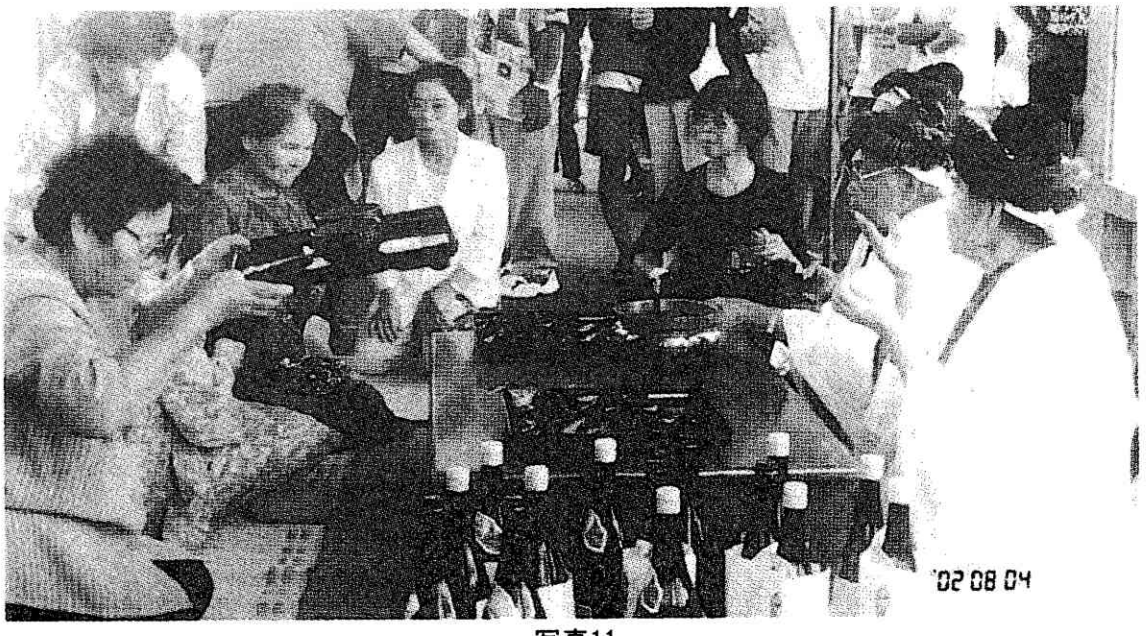


写真11

写真12

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

写真13

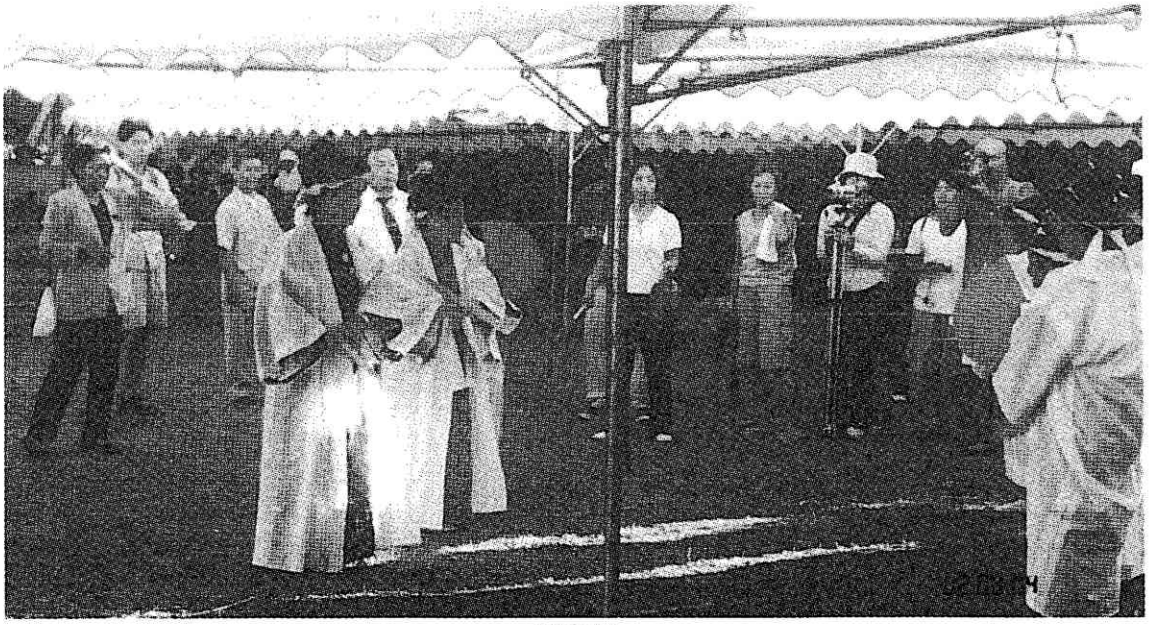


写真14

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

写真15

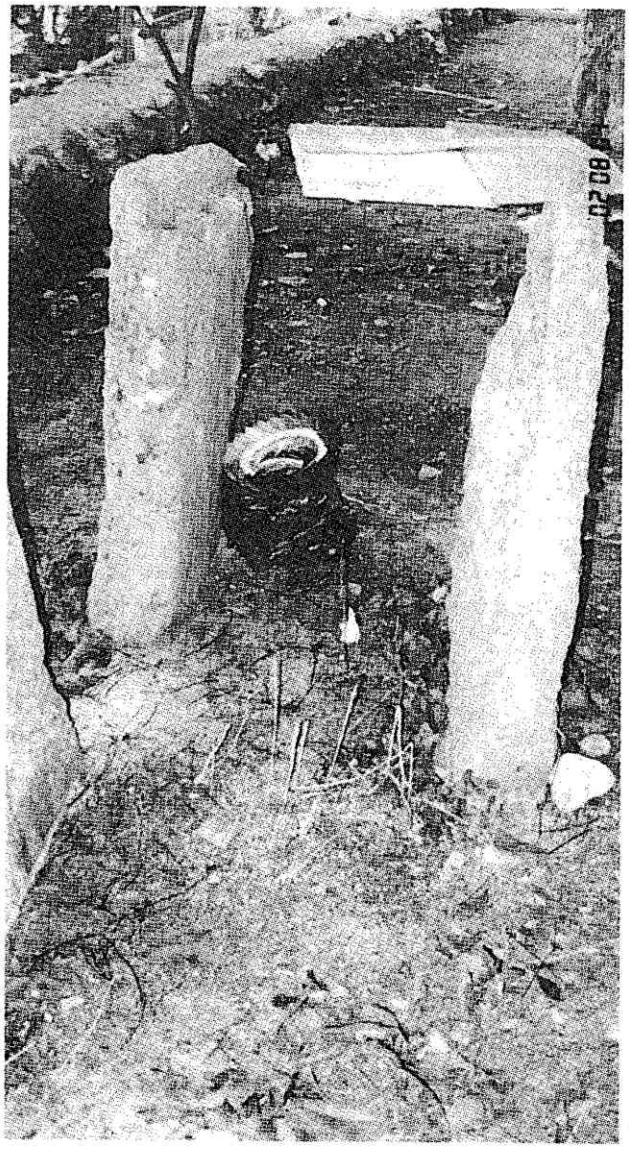


写真16

NII-Electronic Library Service